

貝原益軒の保育観 (一)

土 山 忠 子



貝原益軒は、西暦一六三〇年(寛永七年)から一七一四年(正徳四年)までの江戸時代の八十四年間を生きた人であった。

一般通念として、『貝原益軒』といえば『女大学』、『女大
学』といえば『男尊女卑』、『男尊女卑』といえば『封建思想』
と連想され、益軒の思想などおよそ遠い過去の封建社会の死物
であって、現代においては全く無意味で無価値なものと考えら
れやすい。ことに、『貝原益軒の保育観』など時代錯誤も甚し
いと一笑に付されるかも知れないのである。

しかし、益軒によって今から二百五十年前に執筆された『和
俗童子訓』は、わが国で最初のもっともよくまとまった教育学
の専門書であるといわれている。しかも、『和俗童子訓』の出
たのは、ルソーの『エミール』に先だつこと五十年であり、ま
た、ベスタロッチの初歩的方法の提唱に先だつこと約百年であ

った。その頃、欧州においても、コメニウスやロックの他には
めばしい教育書のなかった時代^②であって、幼児教育史上におけ
る益軒の業績は認められねばならない。

今日のわが国の幼児教育が、ルソー、ベスタロッチ、フレ
ーベル等の西欧の幼児教育思想に負うところが大きいことは言を
またない。しかし、わが国の子どもへの教育を考えると、子ども
は歴史的社会的存在^③であるので、日本という民族や歴史、気候
風土や習慣、精神構造などの影響をうけることも忘れてはなら
ない。

現在は過去を負うとともに未来をはらむということは、幼児
教育においても真実である。益軒の保育観を学ぶということは
は、十八世紀のわが国の過去の幼児教育を回顧するのに止るの
ではない。過去は現在の幼児教育を動かしており、さらによい

未来の幼児教育を生み出す意味をもっているのである。

益軒自身も、『読書法』(和俗童子訓・卷之三)の中に「史は、は、い、し、え古をしるせるふみ也。記録の事なり。史書は、往古の迹をかながへて、今日の鑑とする事なれば、是亦経につぎて必ずよむべし」と古典の意義を明らかにしている。

そこで、わが国で最古の幼児教育学の専門書であるといわれる『和俗童子訓』註を中心として、益軒の保育観を考察してみたと思う。

一、益軒の人間観・児童観

益軒の保育観の考察に先だって、益軒は、人間と児童をどう理解していたかを知りたい。

益軒は、身分階級制の確立した家中心主義の封建社会の中にあって、朱子学思想をもとにして、階級制にとらわれないで、人間平等、人間尊重の思想に立脚していたことがうかがえる。

「人は、我と一類にて、同じく天地の子なれば、人倫の内、親疎ありといへども、其(の)本をたづぬれば、天地の間の人
は、皆我が兄弟也」(初学訓・卷之一)

「およそ、人となれるものは、皆天地の徳をうけ、心に仁・義・

礼・智・信の五性を生まれつきたれば、其の性のままにしたがへば、父子・君臣・夫婦・長幼・五倫の道行はる。是人の、万物にすぐれてたうと(貴)き処なり。」(和俗童子訓・卷之一)
個人が家に埋没した時代に生きながらも、益軒は、人間をその本質において平等視し、人間性の尊厳を認めている点で、近世の封建的時代をはるかに乗り越えていたと見なければならぬ。

しばしば益軒が、男尊女卑の権化のようにいわれるが、女性をその人間性の本質において男性より賤しい劣った者と見下げていたのではない。社会的地位の相違に基づいて、男女の教育法に差違のあることを強調したものと考えられるのである。

『教女子法』(卷之五)の中に、「女子をそだつるも、はじめは、大やう男子とことなる事なし」などの文言によって益軒の女性観を知ることができる。

さらに、子どもに対しても、児童尊重・児童中心思想をひらめかせている。

「小児をもてあそびて、我が心をなぐさめんがために、様々のことばにて、そびやかし、くるしめ、いかり、あらそはしめて、ひがみまがれる心をつけ……」(卷之一)

「子弟をおしゆるに、いかに愚・不肖にして、わかく、いやしきとも、甚(だ)しく忿(かみ)りて、顔色とことばをあら

二、幼児教育の重要性の提唱

らかにし、悪口して、はづかしむべからず。かくの如くすれば、子弟、わが非分なる事をばわまれて、父兄のいましめをいかり、うらみ・そむきて、したがわず……」(巻之二)

「子どもはおとなの縮図」と考えられ、家・親・教師中心の前近代的児童観の風靡した時代にあつて、益軒は、子どもをおとなの所有物として取扱つて子どもを傷ついたり、感情的な叱責をすることは、子どもを無視した非教育的なことであると主張しているのである。

「ばくち(博奕)ににたるあそびは、なましむべからず。小児のあそびをこのむは、つねの情なり。道に害なきわざなれば、あながちにおさえかがめて、其(の)氣を屈せしむべからず。

只、後にすたらぎるあそび：このみは、打まかせがたし」(巻之二)

「いとけなき時より、必(ず)まつ、其(の)このむわざをえらぶべし」(巻之二)

子どもの遊びや興味を抑圧しないで、認め、ただ悪い遊びや、成長後もやめない遊びについては指導の必要性を説いている。

以上のような益軒の抱いていた人間観・児童観は、今日の近代的人間観・児童観と全く同質のものではなかったにせよ、近代教育を指向する人間観・児童観をうちたてたといつてよい。

益軒は、人間は「師のおしえ」即ち「教育」によらなければ、「人間」になることが出来ないこと、その教育の良し悪しによつて、望ましい人間に成長するかしないかの鍵が握られていると、教育の重要性を主張している。

「およそ人の小なるわざも、皆師なく、をしえ(教)なくしては、みづからはなしがたし」(巻之二)

「性悪(せむし)くとも、能(よ)おしえ習はさば、必(ず)よくなるべし。いかに美質の人なりとも、悪くもてなさば、必(ず)悪しきにうつるべし。年少の人の悪くなるは、をしえの道なきゆえなり」

(巻之二)

そして、その教育を始める時期は、「嬰孩(えいがが)の歳」(序)即ち乳児期からであると述べ、『和俗童子訓』の巻頭から、「人に教ふるの法、豫めするを以て急となす」と、「豫めする教育」という益軒の教育観の根底をなす理念を打出している。

「其のをしえは、豫するを先とす。豫とは、かねてよりという意(こころ)。小児の、いまだ悪にうつらぎる先に、かねて、はやくをしゆるを云。はやくをしえずして、あしき事にそ(染)みならひて後は、をしえても、善にうつらず。いましめても、悪をやめがたし」(巻之二)

「風俗の知らない人は、小児をはやくをしゆれば、氣くじけてあしく、只、其(の)心にまかせておくべし、後に知恵出くれば、ひとりよくなるといふ。是必(ず)、おろかなる人のいふ事なり。此(の)言大なる妨なり」(卷之一)

かつて、わが国の常識的な子どものしつけ方として、「幼時はやさしく、長じてきびしく」といったしつけ方の誤りを指摘し、子どもは、早く教育しなければ取り返しがつかない結果を生じると強調している。

米国の文化人類学者ルイス・ベネディクトが日本人の子どもへのしつけ方を評して、「従来すべての西洋人が描いてきた日本人の性格の矛盾は、日本人の子どものしつけ方を見れば納得が行く。……彼らは幼児期の特権と気楽さとの経験から、その後さまざまな訓練を受けた後もなお、『恥を知らなかった』頃の気楽な生活の記憶を保持する」と報じているのであるが、益軒の「小児のおしえは早くすべし」のしつけ方が、過去のわが国の庶民の家庭教育の指針として普及し、徹底していたならば、異った報告がなされていたに違いないと思わせられるのである。

更に益軒は、幼児教育の重要性を、単なる抽象論としてではなく、幼児教育のあらゆる分野にわたって、具体的に述べている。

(a) 道德教育について

益軒の教育の第一目的は、道德的人格者の養成であった。

「師の教をうけ、学問する法は、善をこのみ、行なふを以て、常に志とすべし。学問するは、善を行はんがため也」(卷之二) 故に、幼児教育においても、道德教育に関して多くのすめをなしている。

「およそ人は、よき事もあしき事も、いざしらざるいとけ(幼)なき時より、ならひ(習)なれ(馴)ぬれば、まづ入し事、内にあるじ(主)として、すでに其(の)性となりては、後に又、よき事、あしき事を見きしても、うつり(移)がたければ……」(卷之一)

「人の善悪は、多くはなら(習)ひな(馴)るるによれり。善にならひなるれば、善人となり、悪にならひなるれば、悪人となる。然れば、いとけなき時より、ならひなる事をつつしむべし」(卷之二)

「つねによき事を見せしめ、聞かして、善事にそ(染)みならはしむべし。をのづから善にすすみやすし」(卷之二)

益軒は、道德教育は、「いざしらざるいとけなき時」つまり乳幼児期からであるという。未成熟であり、未分化であるこの時期に、善悪に対して正しく教えられなければ、後の道德

教育は非常に困難であると力説しているのである。この事は、今日の近代的幼児教育においては、心理学的にも生理学的にもすでに解明された周知の事柄であるが、近世においては益軒の卓見といわなければならない。

さらに、その善悪のしつけ方は、「善に習ひ馴れさせよ」つまり「善い事を習い性たらしめよ」と教えている。今日の心理学的表現を用いれば、「反復による行動の習慣化」であり、発達段階の低い乳幼児期に最も適したしつけ方である。

なお、それだけにとどまらず「つねによき事を見せしめ、聞かしめ、善事にそ（染）みならはしむべし」と、論をすすめている。道徳教育は、子どもを一方的にしつけるだけでは片手落ちであって、子どもをとりまく周囲のおとなたちの模範的言動や、家庭のふんいきが乳幼児に無意図的に及ぼす教育的感化力の強いことを教えている。

このようなしつけ方の結果として、益軒の理想的人間像が次のように描き出されている。

「小児の時より、心もちやはらかに、人をいつくしみ、なきけありて、人をくるしめ、あなどらず、つねに善をこのみ、人を愛し、仁を行なふを以（て）志とすべし」（巻之一）

(b) 知性教育について

「凡（そ）子弟年わかきともがら、あしき友にまじはりて、心うつりゆけば、酒色にふけり、淫楽をこのみ、放逸にながれ、……一かたに悪しき道におもむきて、よき事をこのまず。……書をよみ、芸術をならふ事をきらひ、……なかにも書をよむ事をふかくきらふ」（巻之二）

「年わかき人、書をよまんとすれば、無学なる人、これを云さまたげて、書をよめば心ぬるく、病者になりて、気よはく、いのちみじかくなる、と云ておどせば、父母おろかなれば、まことぞ、と心得て、書をよましめず。其（の）子は一生おろかにておはる。不幸と云べし」（巻之二）

益軒は、子どもの遊びは自然的発達であって、これを認めてやると同時に、子どもが学問を嫌う悪風に染まないように注意し、書を読むこと、知性の教育を軽んずることは、子どもにとって一生の不幸であると、学問の必要性を重視しているのである。

『随年教法、読書法』（和俗童子訓・巻之三）において、六歳から二十歳までの子どもの学習過程における教材・学習法・学習順序・学習態度などに至るまで、子どもの心身の発達段階に即した詳細なカリキュラムを設定している。この益軒の『随年教法』は、わが国の教育史上においては、はじめての試みとして高く評価されているのである。^⑥

「小児の文学のをしえは、事しげくすべからず。事しげく、文句おほくして、むつかしければ、学問をくるしみて、うとんじきらふ心、出来る事あり。故に簡要をえらび、事すくなくおしゆべし。すこしずつをしえ、よみならふ事をきらはずして、其(の)氣を屈せしむべからず。日々のつとめの課程を、よきほどにみじかくきだめて、日々をこたりにくすむべし(巻之三)

心理学の未だ体系化されない時代にもかかわらず、益軒は、児童心理学を専攻したのではないかと思われるほど、子どもの心理をよく理解し把握し、どのような教育方法がもっとも学習を効果的にするかを適切に論じている。

さらに、知性教育は男児だけに必要であるのではなく、女子教育にも欠くことができないと女子教育必要論を述べている。

「又、女子も、物を正しくかき、算数をならふべし。物かき、算をしらざれば、家の事をしるし、財をはかる事あたはず。必(ず)これををしゆべし」(巻之五)

当時、女子教育といえば徳育以外に及ばなかった時代に、儒教的厳格主義のみに偏らないで、女子に知的教養の必要性を強調したのである。

また、学問は、貴賤・階級を問わず、すべての人間が学ばなければならぬとし、「邑に不学の戸なく、家に不学の人なか

らしめん」の思想を打出している。

「六芸のうち、物かき・算数をする事は、殊に貴賤・四民ともにならほしむべし」(巻之二)

(c) 宗教教育について

益軒は、宗教に対して、暗示性と軽信性の強い乳幼児期から正しい宗教的態度が指導されなければ、子どもは無批判的、模倣的にうけ入れ、生涯を通じて宗教的混沌の生活を送る結果になると警告している。

「又道理なき、正しからざるふだまぶり(札守)、祈禱などを、みだりに信じてまよへる事、禁ずべし。いとけなく、若き時より、かやうの事に心まどひぬれば、其(の)心、くせになりて、一生其(の)まよひとけざるなり」(巻之二)

わが国の「鯛の頭も信心から」といった宗教に対する曖昧な一般的态度や、迷信的信仰の往来する社会の中において、益軒がとったこの明確な宗教的見解と態度は、近代的、理性的であって、驚異に値するものである。

(d) 情操教育について

情操教育の定義は、ほとんど不可能に近いといわれるが、益軒は情操教育を今まで述べてきた道徳、知性、宗教の教育に美

の教育を含めて理解している。一般的には美的教育を情操教育の中心的な内容としている。

益軒自身は、多くの詩文集・和歌に親しみ、東軒夫人と共に和歌を詠み、箏・胡琴の合奏を楽しんだり、古楽のつどいをしれば家庭で開いたと伝えられているから、益軒は、美的、芸術的なものを愛し鑑賞し、風雅を喜ぶ豊かな感情を養う教育について心を用いて、次のように述べている。

「いとけなき時より、必(ず)まづ、其(の)このむわざをえらぶべし。このむ所、尤(も)大事也。淫欲のたはぶれをこのみ、淫楽などをこのむ事、又、ついえ多きあそびを、まづはや(早)くいましむべし。これをこのめば、其(の)心必(ず)放逸になる。いとけなき時よりこのめば、そのころぐせ(心癖)となり、一生、其(の)このみやまざるものなり」(巻之一)

乳幼児期に、みだらな遊びや音楽を好むと、一生それが癖となってその好みが止まないのです、子どもの情緒や人格形成にとって有害無益なものは、早くやめさせ、良きものを選択して与えなければならぬと主張している。

遊びや音楽だけでなく、子どもの着る衣服についても、美的センスを養い、華美をいましめ、教養ある上品な柄と色彩を選んで着せるように注意を促している。情操教育が、ただ「おけ

いごと」として技能の修練に終らないで、潤いのある豊かなものが日常生活の中に生かされるようにとの意図が現わされている。

「小児の衣服は、はなやかなるも、くるしからずといえども、大もやう(模様)、大じま(縞)、紅(紫)などの、ぎ(戯)ればみたるは、き(着)るべからず。小児も、ちとくす(燻)み過たるは、あでやかにして、いやしからず。はなやか過て、目につは、いやしくして、下部の服のごとし。大かた、衣服のもやうにても、人の心は、おしはかるるものなれば、心を用ゆべし」

(e) 健康教育について

益軒は、子どもの身体的養成に関しても懇切に教えている。衣服については、「衣をうすくし」「きぬの新しくして温るは、熱を生じて病となる」「少しはひやすがよし」「衣をあつくして、あたため過せば、熱を生じ、元氣をもらすゆへ、筋骨ゆるまりて、身よはし」「からも、やまとも、古より、童子の衣のわきをあくるは、童子は気きかんにして、熱おほきゆへ、熱をもらさんがため也。是を以(て)、小児は、あたためすじすがあしき事をするべし。」(巻之一)と、再三くりかえして、子どもの厚着の弊害を語り、子どもは、活動的で体温が高いか

ら、通気性のある衣服を着せることが健康上望ましいとすすめている。

食物に関しては、「乳食にあかしむれば、必(ず)病多し」「小児に乳食を、おほくあたへてあか(飽)しめ、甘き物、くだ物を、多くく(食)はしむる故に、氣ふさがりて、必(ず)脾胃をやぶり、病を生ず」(巻之二)と、子どもの暴飲暴食をいましめている。

さらに、日光浴、外気浴の身体への効用を語り、子どもは、自然の大気の中でこそ健康に成長することが出来ると教えている。

「天気よき時は、おりおり外にいだして風・日にあたらしむべし。かくのごとくすれば、はだえ堅く、血氣つよく成て、風寒に感ぜず。風・日にあたられれば、はだへもろくして、風寒に感じやすく、わづらひおほし」(巻之二)

このように、益軒が子どもの身体的養育に関して細心の注意を述べたのは、益軒が儒学者であり、教育学者であるばかりでなく、医学者であったことを物語っている。それは、益軒の読書傾向^⑩を見てもうかがい知ることが出来る。また七十七歳のときにオランダ医学の優秀性を認識している点、また多くの医学者と親交のあったこと、さらに亡くなる一年前の八十四歳の時に、益軒自らの健康状態を資料にした『養生訓』を大成していることなどから推察して、益軒の子どもへの健康教育は、医学

的見識の深さから出たものであることが知られるのである。

以上の考察の結果、益軒は、人間の教育が「豫めずる」ことを第一条件とし、道徳・知性・宗教・情操・健康などの人間生活の全分野にわたって、知育、徳育、体育の何れにも偏らない全人的教育の必要性を説いていることを知ることができるのである。(薫英女子短期大学)

〔引用文献〕

- ①石川 謙著 我国における児童観の発達 振鈴社・昭二四・一七九頁
- ②加藤・工藤著 遠藤・加藤共著 新日本教育史 協同出版 昭四〇・八九頁
- ③守屋 光雄著 発達心理学 朝倉書店 昭三九・七頁
- ④ルイス・ベネディクト著 長谷 川 松 治 訳 菊と刀(下) 社会思想社昭四一・一八一頁
- ⑤山下 俊郎著 家庭教育 光生館 昭四一・一〇八頁
- ⑥中泉 哲俊著 日本近世教育思想の研究 吉川弘文館 昭四一・二〇〇頁
- ⑦中泉 哲俊著 前掲書⑥ 三二九頁
- ⑧大津 親人著 「情操教育の史的展望」教育と医学 一七巻四号 昭四四・三四頁
- ⑨井上 忠著 貝原益軒 吉川弘文館 昭三八・二二六頁
- ⑩井上 忠著 貝原益軒「益軒の読書傾向一覽表」吉川弘文館 昭三八・一八六頁
- ⑪井上 忠著 前掲書⑨ 二八一頁
- 註貝原 益軒著 和俗童子訓(貝原益軒 室鳩巢集石川松太郎校註) 玉川大学 昭四三